

平成20年(ワ)第1978、2900、4164、5102号

平成21年(ワ)第1152号、2728号、4662号

ウイルス性肝炎患者の救済を求める全国B型肝炎訴訟・九州訴訟損害賠償請求  
事件

原告 原告番号1番ないし116番

被告 国

## 意見陳述書

平成22年1月26日

福岡地方裁判所第2民事部合議係 御中

原告 原告番号111番

### 1 はじめに

原告番号111番です。現在43歳です。

現在、慢性肝炎と診断されています。

### 2 肝炎発症までの生活

23歳のときに結婚して、2人の男の子が産まれました。

息子たちを授かった後に、それまでのサラリーマン生活を思い切って辞め、  
自分で運送会社を立ち上げました。

34歳のとき、妻とは離婚することになりました。息子たちが小学2年生と  
小学1年生のときでした。まだ幼い息子たちを、私1人で育てていくことにな  
りました。

息子たちを大学くらいはやれるように、しっかり働かなければならないなど  
思っていました。

昼夜問わず、がむしゃらに働きました。

忙しい仕事の間をぬって、息子たちとの時間も大切にしました。毎日一緒  
に入るお風呂の時間が何よりの楽しみでした。母親がいないことでさみしい  
思いをさせてはいけないとも思いました。息子たちの夏休みには、時間を作  
ってディズニーランドや沖縄と一緒に遊びに行ったりしました。

### 3 B型肝炎の発症

離婚から1年ほどたった35歳の時のことです。いつものように仕事をしていると、突然身体の調子がおかしくなりました。背中あたりに何とも言い難い変な汗をかくようになり、とてもだるくなりました。

風邪でもひいたかなと思い、病院に行きました。

病院から帰ると、留守番電話に1件のメッセージが入っていました。診察してくれた医師が慌てた口調で「すぐに連絡するように。」とのことでした。

電話すると、「肝機能数値が800近い。大きな病院に紹介状を書くから、すぐに行くように。」と言われました。

体調はみるみる悪くなっていきました。ふらふらしながら、紹介された病院に行きました。肝機能数値は2000まで上がっていました。

「このままだったら死ぬよ。」医師からそう言われ、緊急入院することになりました。

入院するまでのやりとりを傍らで見ていた幼い長男は、一緒に待っていた私の母に「お父さん死ぬん。死ぬん。」と心配していたそうです。

### 4 発症後の生活

入院中、自分がかかっている病気のことを医師から聞きました。

発症したのは「B型肝炎」という病気で、ガンに進んでいく病気であるとの説明を受けました。突然のことでした。子どもたちの顔が頭に浮かびました。

体の具合も毎日の治療もしんどいものでした。焦げ茶色の尿が出ました。真っ白な便も出ました。2週間の予定の入院が1ヶ月になりました。いったんは退院したものの、約1ヶ月後、肝機能の数値が上がって再び入院することになりました。「どうしてまた。」という思いでした。

入院中、息子たちには一切見舞いに来るなど言いました。

父親として弱い姿は見せたくなかったからです。

息子たちは毎日電話をかけてきました。「治りようか。治りようか。」しきりに聞いてきました。私しか親を持たない息子たちを、悲しませてはならないと思いました。声だけは元気に「大丈夫。大丈夫。」と答えました。

それまで元気だった父親が突然入院したことが、長男にはトラウマになりました。過剰なほど心配するようになりました。

### 5 家族に感染させないように気をつけていること

(1) 医師からは、B型肝炎は血液でうつる病気だと言われました。

日常生活でうつることはまずないとも言われました。しかし、万が一にも

息子たちにうつすわけにはいかない。自分が触ったもの、自分が着たもの、自分が口をつけたもの。その中にウイルスがいるかもしれない。うつらないと頭でわかっているけど、何をしても神経質になりました。

「父ちゃん肝臓の病気だから、父ちゃんのお箸は使わないよ。」「歯ブラシ、カミソリには絶対に触るなよ。」まだ小学校低学年だった息子たちにうるさいくらい言いつけました。

食事についても、いつも私の分だけ大皿とは別です。鍋をするときも私の分だけ小さな鍋にうつして食べるようにしています。洗面所のタオルも別々で、顔を拭いたらすぐ洗濯機に入れます。私が着た服も触らせません。

ずっと一緒に入っていたお風呂も別々に入るしかありませんでした。子どもたちは、「なんで、なんで」と聞いてきました。私は「父ちゃんは病気だから」と言うしかありませんでした。湯船に入ることもこわくなり、シャワーだけで済ませています。

(2) 一昨年、再婚をしました。

妻には付き合い始めてすぐに病気のことを打ち明けました。うつる病気であることも話しました。

受け入れてくれなかったらどうしよう。一か八かの告白でした。「大事な話がある」と呼び出したときの私の強張った顔を、妻は今でも忘れられないと言います。

妻は病気のことを理解して受け入れてくれました。

妻にも絶対にこの病気をうつすわけにはいきません。定期的にワクチンを受けに行ってもらっています。

## 6 最後に

41歳のとき、再び肝機能の数値が700まで上がり、医師に「入院しなさい」と告げられました。

そう何度も何度も入院しては、会社が潰れてしまいます。私は入院を断り、毎日仕事の合間に通院して、投薬、点滴の治療をおこなうという形をとってもらいました。またいつ悪くなるのか予測が付きません。

ゼフィックスから始まり、これまで色々な薬を飲んできましたが、ことごとく耐性ができてしまいました。今は、最後の手段と言われているバラクルードを飲んでいますが、これにも耐性ができたら、もう飲む薬がないと言われていきます。

薬の副作用で眠れなくなり、睡眠薬も飲んでいますが、それでも夜は眠れません。

再び肝機能数値があがってつらい治療に戻ることに不安。肝硬変、肝ガ

ンに病気が進行していく不安。自分に万が一のことがあったら。従業員を路頭に迷わせることに対する不安。病気を受け入れてくれた妻、大学受験を控えている息子たちの将来に対する不安。

布団の中でいろんな不安が頭に浮かび、安心して眠れる日はありません。

今はバラクルードで症状が落ち着いていますが、この薬にも耐性ができるともう後がありません。私に効く薬は他にもう残っていないのです。

私たちが被害の声をあげられるうちに、国は、自らがやったことの責任をとって一刻も早く解決してください。よろしくお願いします。

以上